聖　書：創世記 15：7〜21
説教題：主は契約を結んで
日　時：2023 年 7 月 32 日（朝拝）

創世記の 12 章で神から召命を受け、神に従う歩みをして来たアブラム。色々なことがあって今、15 章まで来ました。その冒頭の 1 節で主はアブラムに「恐れるな」と語りかけられました。アブラムは何を恐れていたのでしょうか。その後のやり取りを見ると、それは約束がいまだ果たされていないという状態と関係があったようです。アブラムは前回の 1〜6 節で、まず子が与えられていないことについて主に問いました。「神、主よ、あなたは私に何を下さるのですか。私は子がないままで死のうとしています。」　これは不信仰から出た問いではなく、信じているからこそ出た問いであろうということを前回見ました。そんな彼に主は「あなた自身から生まれ出てくる者が、あなたの跡を継がなければならない」と言われ、さらに天の星を仰がせて「あなたの子孫は、このようになる」と言われました。この導きを受けて、6 節に「アブラムは主を信じた。それで、それが彼の義と認められた。」と記されました。

さて今日見る 7 節以降は、約束のもう一つのテーマ、土地に関するものです。主は 7 節で「わたしは、この地をあなたの所有としてあなたに与えるために、カルデア人のウルからあなたを導き出した主である」と言われました。それに対してアブラムは 8 節で「神、主よ。私がそれを所有することが、何によって分かるでしょうか」と再び問います。「何によって分かるでしょうか」という問いは、彼がいまだ約束の土地を全然所有していないということを前提にしています。ですから「何によって分かるでしょうか」と彼は問うています。これはイライラしたり、不信仰から出たものではなく、先の問いと同じように、主の約束を信じ続けているからこそのものです。今すぐそれが与えられなくても、せめてそのしるしをくださいませんかとアブラムは求めました。主は彼の願いを退けず、その求めに答えてくださいました。9 節：「すると主は彼に言われた。『わたしのところに、三歳の雌牛と、三歳の雌やぎと、三歳の雄羊と、山鳩と、鳩のひなを持って来なさい。』」　アブラムはそれらすべてを持って来て、真っ二つに切り裂き、その半分を互いに向かい合わせにしました。ただし鳥は切り裂きませんでした。サイズが小さかったからでしょうか。果たしてこれはどんな意味を持つ行為だったのでしょうか。

これは当時の契約を結ぶやり方だったようです。契約を結ぶ当事者は切り裂かれたものの間を通り、もし契約を破った場合は、この切り裂かれた生き物のようにされても構わないと誓ったようです。聖書の中で参考になるのはエレミヤ書 34 章 18 節です。「また、わたしの前で結んだ契約のことばを守らず、わたしの契約を破った者たちを、彼らが二つに断ち切ってその二つの間を通った、あの子牛のようにする。」

アブラムは準備をし、その後の指示を待ちます。11 節に「猛禽がそれらの死体の上に降りて来た。アブラムはそれらを追い払った。」とあります。これはこの後に語られる内容と関係があるようです。日が沈みかけたころ、深い眠りがアブラムを襲いました。「そして、見よ、大いなる暗闇の恐怖が彼を襲った」とあります。これもこの後、語られる啓示の内容と関わるのでしょう。そして主が言われました。「あなたは、このことをよく知っておきなさい」と前置きされた後、まず言われたことは「あなたの子孫は、自分たちのものでない地で寄留者となり、四百年の間、奴隷となって苦しめられる」ということでした。このようないわば不吉なことがアブラムの子孫に臨むということが語られることに備えて、猛禽が降りて来てアブラムがそれと戦わなければならなかったとか、大いなる暗闇の恐怖が彼を襲うということがあったのでしょう。何とアブラムの子孫はまず 400 年間も、他国の地で寄留者となり、奴隷となり、苦しめられると言います。子孫をくださるのはいいですが、なぜそんなことが必要なのでしょうか。しかし話はそれで終わりとならず、そこから出て来るとも告げられます。しかも多くの財産を持って。一方、アブラム自身はその前に地上を去るとも言われます。そしてこの地に戻って来るのに時間がかかるのはアモリ人すなわちカナン人の咎がその時までに満ちないからだと言われます。ここから神のご計画についていくつかの大切なポイントを知ることができます。その一つ目は神はご自分の民が苦難にあうことを許すということです。なぜこんな苦しい期間をアブラムの子孫は経験しなければならないのでしょうか。それは彼らが罪を犯すからではありません。罪への罰ではありません。ではなぜなのか。その理由は残念ながらここには書いてありません。私たちは聖書の他の箇所から、神はご自分の民を訓練し、聖めるために苦難を用いることを知っています。神への信仰を持った人は他の人よりも楽な人生を過ごせるとは聖書で約束されていません。むしろ試みの中に置かれると言われています。それにしても 400 年も！です。私たちは数日間待つだけでも忍耐が切れやすいものです。しかし神のタイムスケジュールは私たちの考えよりもはるかに大きなスパンで考えられており、長い！ということをまず思わされます。

二つ目に、しかし苦難が最後ではありません。そこから必ず出て来ると言われています。しかも多くの財産を持ってです。ここに苦難を経て祝福に至ること、苦難を経て栄光に至るという順序が神の計画の中にあることを教えられます。

三つ目に、しかしアブラムはその前に地上を去ると言われています。私たちはこれを聞いて、これでは意味がない！と思うかもしれません。これでは時間をかけて待っても報われない！と。しかしそうではありません。私たちはむしろここからもこの世がすべてではないという聖書の教えを受け取ります。アブラムが待ち望んでいたのはこの世の都ではなく、天の都・天の故郷だったとヘブル人への手紙 11 章に記されています。地上の人生がすべてではないのです。むしろ地上の人生は永遠に比べればほんの一瞬の事柄であるとさえ言えます。私たちはこの世で神の祝福を味わって生きることができますが、本当に良いものはこれから先にあります。地上にある間の苦難は、その先にあるものを私たちに待ち望ませるためにも必要なものです。真の祝福、最高の祝福は、この世を越えたところに備えられ、そこで私たちに与えられるのです。

そして四つ目はカナン入国は神のさばきの使いとして入って行くという出来事になるということです。ですからこれは身勝手な侵略とは違います。神はカナン人の罪を見て直ちに滅ぼすのではなく、憐み深くさばきの時を遅らせ、彼らの悔い改めを待っています。しかしその咎が満ちた時、イスラエルは神のさばきの道具となってその地に入って行くのです。ヨシュア記に記されるカナン入国は、この視点で考えられなければなりません。

さて、日が沈んで暗くなった時、ついに契約を結ぶ儀式が行われます。17 節：「見よ、煙の立つかまどと、燃えているたいまつが、切り裂かれた物の間を通り過ぎた。」ここで通り過ぎた二つのものは、出エジプトにおいて神の臨在の象徴として民を導いた雲の柱、火の柱にそれぞれ対応するものと言われます。つまり神ご自身がここを通られたのです。そして受け継ぐ土地の範囲に関する主の言葉が語られました。ここでまず注目すべきは、切り裂かれたものの間を通ったのは主お一人だけだったことです。この契約は主がアブラムと結ばれたものですから、主とアブラムの両方が切り裂かれたものの間を通ることが期待されました。しかしアブラムは通らず、主なる神のみが通られました。これは契約を果たすための全責任を神が取ってくださるということを

示しています。もしこれが果たされないようなことがあれば神ご自身が引き裂かれたもののようになっても良いとまで誓ってくださったのです。

　そしてご自身が与える土地の範囲についても明らかにしてくださいました。エジプトの川とはナイル川ではなく、シナイ北部にあるカナンとエジプトの境界となる川のことと思われます。聖書巻末に載っている地図では「エジプト川」と記されています。その川から、あの大河ユーフラテスまでと言われます。広い地域です。そしてそこに住む人々の名前が列挙されています。ダビデ・ソロモンの時代に、そこまで広がることになります。そういう意味で私たちは今、創世記前半のイスラエルの始まりの部分を読んでいますが、この創世記全体どころか次の出エジプト記の出来事、さらにはヨシュア記、士師記、サムエル記、列王記の頃までの神の民の歩みが一気にここに言われていることになります。

　以上の箇所から今朝、私たちは二つのことを心に留めたいと思います。一つ目は神のご計画のスケールの大きさということです。土地に関する約束を巡ってアブラムに示されたのは、まず子孫は他の国へ行って奴隷となること、そして戻って来るのは何とそれから 400 年後ということでした。これはエジプトでの生活のことです。出エジプト記 12 章 40 節：「イスラエルの子らがエジプトに滞在していた期間は、四百三十年であった。」　アブラムはこれを聞いてどう思ったでしょうか。私たちなら気が遠くなるでしょうか。神のタイムスケジュールは私たちが思い描くタイムスケジュールと、そのスケールが違うということを思わされます。ですから私たちの思った通りに事が進まないとしても、それで希望を投げ捨ててはならないということになります。自分の思った通りでないということは、神は働いていないとか、その約束は成就しないということを意味しません。たとえ私たちにとって長い期間のように思われても、神のご計画からすればまだまだ短い期間でしかないかもしれません。ですからそれだけの時間が経過しても神の計画においては問題ない！ということです。神が計画している最高に良いものはこれから来ます。今の苦難が最後ではありません。またこの世がすべてではありません。次の世まで含めてトータルに神はご計画をされています。神の約束が最終的に成就する日が来ます。ですから私たちはなお忍耐を保ち、神を信じる歩みを続ける者へと導かれたいと思います。ここまで待ったアブラムが、さらにその先が途方もなく長いことを知らされても、いよいよ目を高く上げて神を信じる歩みを続けて行ったように、私たちも自分が立てたタイムスケジュールに基づいて勝手に焦

るのではなく、神が持っておられる最善でスケールの大きなご計画に信頼し、従って行く者へ導かれたいと思います。

　もう一つは、その信仰の歩みのために、神がここで神が誓われた姿を良く見つめる者でありたいということです。今日の箇所で神お一人だけが切り裂かれたものの間を通られました。アブラムには歩かせませんでした。もしこの契約が果たされないようなことがあれば、ご自身が切り裂かれることをよしとすると主はご自身のいのちをかけて約束してくださいました。どんなことがあってもこの約束を守る！と。しかし私たちのような者を相手とする契約を結んで神は本当にそれを果たすことができるのでしょうか。神は真実でも私たちが不真実であるため、この関係を壊し、無にしてしまうことはないのでしょうか。しかし神はご自身の真実をかけて、この後もこの契約を守って行ってくださいます。そしてそのために神がついにされたことが御子イエス・キリストの十字架の死でした。神はそこで私たちが引き裂かれるのではなく、ご自身の独り子が私たちの代わりに引き裂かれるようにしてくださいました。私たちの上に下って然るべき呪いを私たちに下すのでなく、ご自分の側でそれを引き受け、犠牲を払い、処理されるようにしてくださいました。そのようにしてまでも神はここで誓われた契約を真実に守り続け、その約束を実現してくださるのです。神はそのようなご自分の姿を今日の箇所で示して、ご自身を信じる歩みに進むようにと今日の私たちをも招いておられます。私たちの今の生活は私たちが考えたタイムスケジュールと違うかもしれません。私が思い描いた人生とは異なっているかもしれません。しかし神のお考えは私たちの考えよりもはるかに大きく、確実なご計画を持っていてくださいます。苦難を通して栄光へと導いてくださいます。主は私たちに語っておられます。「わたしは約束する。全能の神として誓う。わたし自身のいのちをかけてわたしはわたしの契約を必ず果たす。」　今どのような中にあっても、このように約束くださっている神を見上げて、またそのために尊い一人子さえも惜しまずに遣わし、与えてくださった神を見上げて、私たちはもう一度この神への信仰を感謝をもって告白し、約束のものに高く目を上げて、神にお従いする信仰の歩みを続ける者とされたいと思います。